

重刊改修捷解新語の諸本とその板木

辻 星児*

1. はじめに

朝鮮王朝時代、司訳院倭学において日本語学習用のテキストとして編まれた『捷解新語』は、日本語史、朝鮮語史双方において価値の高い言語資料として知られており、同時に日朝の文化交流史においても注目すべき資料である。

『捷解新語』は、そのいわゆる原刊本が肅宗2年（康熙丙辰1676年）に刊行され、その後、第1次の改修本（木版本）が英祖24年（乾隆戊辰1748年）に印行された。その後、さらに第2次の改修が行われ活字印行されたものの、印本が散逸したため、正祖5年（乾隆辛丑1781年）に重刊された。現在、印本が残っているのは、第2次改修本を除く、原刊本諸本（覆丙辰を含む）、第1次改修本、第2次改修本の重刊本（重刊改修本、以下重刊本とする）である（安田1990他）。このうち、重刊本については、その刊行（1781年）以後、司訳院の閉鎖（1894年）まで、100年余に亘って用いられたため、何度か印刷されたものと思われ、次節に挙げるいくつかの諸本が伝わっている。いっぽう、重刊本には、その板木（冊板）が部分的ではあるが、残存している。筆者は、以前より重刊本の諸本を調査し、2006年には韓国の高麗大学校において同博物館所蔵の板木を詳しく調査する機会をえた。これまで重刊本と原刊本・改修本との関係は数多く研究されてきたが、重刊本諸本の残存状況や印刷の前後関係、板木との関係については、殆ど問題にされていない。本稿では、この問題を取り上げ、残存している諸本と板木について残存状況を概観したのち、板木諸本の前後関係を考えていきたい^{注1}。

2. 重刊本の諸本について

筆者がこれまで調査しえた版本とその書誌的概要は以下のとおりである。

奎章閣本：韓国ソウル大学校奎章閣蔵

10巻12冊；図書番号：奎貴3952；巻十は上中下に分冊

巻末（巻十下末）に「伊呂波真字半字竝録」「伊呂波吐字」「伊呂波合字」「伊呂波真字草字竝録」「簡格語録」「伊呂波半字豎相通」「伊呂波半字横相通」の付録がある（以下「伊呂波」の付録と略称する）。（影印本：弘文閣（1990））

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授

中央図書館本：韓国国立中央図書館蔵

10巻11冊；分類記号 朝鮮総督府古書部 古朝40；請求記号 한古朝40-4

本書は巻十下を欠く。巻十上と巻十中が合本されており、全11冊。

一篲文庫本：韓国ソウル大学校奎章閣蔵（零本）（旧一篲文庫蔵）

巻7 9、3冊；図書番号：일사古49568 G155c

韓国の国語学者でソウル大学校文理科大学教授・学長であった方鍾鉉教授（1905 1952）（号は一篲）の蔵書であったが、同氏が1952年ソウル大学校に寄贈したため、現在は奎章閣所蔵本となっている。保存状態が悪く、断片のみの部分もある（上記 とこの についての書誌については辻（2003）を参照）。

濯足文庫本：日本駒沢大学附属図書館濯足文庫蔵（金沢博士 旧永平寺本）

10巻12冊；請求番号 370-1～12

言語学、国語学の研究者であった金沢庄三郎博士（1872 1967）の旧蔵本（濯足庵）であったが、金沢博士が永平寺に蔵書を寄進したため、永平寺蔵本となり、のち駒沢大学濯足文庫蔵となった。

巻1は全て筆写。本書は、巻首の序、凡例、巻末の「伊呂波」の付録、戊辰改修時考校官、辛丑重刊時校正官をすべて欠く。

小倉文庫本：日本東京大学文学部言語学研究室小倉文庫蔵

10巻12冊；図書登録番号 5046-57

東京帝国大学文学部言語学科・京城帝国大学兼任教授 小倉進平博士（1882 1944）旧蔵本
巻2を欠くが、小倉進平博士によるペン書きで補う。巻2末尾に「昭和十七年十月十七日、京城出張の際 松波宅にて書写」とある。紙質、印刷が悪い。各所に筆による補写やなぞりが見られる。補写部分の張付けを以下に記す。

巻1：25、26；巻4：10 15、18、19；巻5：13、14；巻6：6、7；巻8：25、26

巻首の序、凡例、巻末の「伊呂波」の付録、戊辰改修時考校官、辛丑重刊時校正官をすべて欠く。

東洋文庫本：日本国立国会図書館支部東洋文庫蔵（幣原坦博士旧蔵本 1941年寄贈）

10巻12冊；図書番号 1-55；巻十は上中下に分冊（完本）；

「伊呂波」の付録は巻10下末に付載。

（影印本：京大国語国文学研究室編（1960；1973））

以上6種の諸本は、いずれも同じ板木から刷られたものとみられる。しかし微細にみるとき、一部ではあるが諸本間で異同がある。その異同は、1回1回の印刷の問題に依る場合もあるが、板木の摩滅や改変に依ることもある。次に重刊本の板木について見てみる。

3. 板木について

重刊改修本の板木が残存していることは、つとに新村(1918)で知られている。この部分を新村(1972)より以下に引用する。

「往時朝鮮に於て訳官の用に供せし日満蒙語学書^{注2)}の古板木の残存せるもの、其数各種合せて二十有八枚(両面彫刻)今京都帝国大学文科大学に蔵せらる。嘗て(大正三年)故理学士和田雄治氏(仁川の観測所長)の寄贈せし所にして、日韓併合以前古く散逸したりしを発見し保存せしものと伝ふ。語学書は凡て九種、日本満洲及蒙古三土の言語に属するもの各三種を算し、板木毎種僅に一片なるあり、多きも九片を上らず。然るにこれら九種の語学書、今やいづれも稀覯となすべく、……之を合するも其部数極めて少しとす。……従ひて残闕の板木其数かくの如く僅少にして、新摺せる紙片かくの如く数葉に足らざるものありと雖も、空しく板材の俥研究室の一隅に置かんよりは、寧ろ之を印行して同学博雅の士に頒たん方、裨益する所あるべきこと多説を俟たず。云々」

とある。重刊本の板木は7枚で、張数は、

1-27, 1-28; 3-11, 3-12; 7-6, 7-7; 8-1, 8-2; 8-23, 8-24; 9-11, 9-12; 9-13, 9-14

である(言うまでもなく、例えば、ここでの1枚目の板木は、1-27が表面に、1-28が裏面に彫られている)。1918年7月、この板木7枚によって新たに刷られ、その影印14張が上記「解説」とともに公刊されている。

その後、鄭光(1989=2002)は、1989年当時に京都大学附属図書館の地下倉庫に保管されている重刊本その他の板木を調査、報告しているが、重刊本については、(大正3年当時と同じく)7枚(14葉)であることと、その冊葉数(張数)を挙げているにすぎない。ただし張数に1ヶ所誤りがある。8-13・14(鄭光2002:52)は8-23・24である。

いっぽう、韓国高麗大学校博物館にも重刊本の板木が所蔵されている。高麗大学校博物館編(1989:280ff)の「板木類」のうち、一連番号344、収蔵番号D1263の板木(名称「改修捷解」)以下、一連番号402、収蔵番号D1321までの板木59枚が重刊本であるが、さらに一連番号847、収蔵番号D1765(名称「重刊捷解」)の1枚も重刊本(序1・2)である。全体で120張となる。そして、これらの板木によって新摺されたものの影印が鄭光・尹世英(1998)の第2部に掲載されている。また板木と張との関係は同書第3章に詳しい。同書には、京大所蔵の板木について言及がないようなので若干の考察を行う。

いま、京大所蔵の板木と高麗大所蔵の板木を合わせると重なるものはない。両者が同一本の板

木であることは疑いない。京大所蔵14張プラス高麗大所蔵120張であわせて134張となる。重刊本の張数は付録の伊呂波8張を除くと全体で308張である。したがって、全体から言うと44%の板木が残存していることになる。巻別の残存板木を上記鄭光・尹世英（1998：250）の表に京都大学所蔵の板木を加えたものを以下に挙げる（下線部が京大蔵）。

重刊序1・2、凡例7

巻1：1・2；5・6；7・8；9・10；13・14；15・16；21・22；27・28；29・30

巻2：9・10；11・12；15・16；17・18

巻3：3・4；7・8；11・12；13・14；21・22；25・26；27・28

巻4：2・3；12・13；14・15；18・19；22・23；32・33；34・35

巻5：7・8；11・12；13・14；15・16；17・18；19・20

巻6：1・2；13・14；17・18；31・7-1

巻7：4・5；6・7；12・13；16・17；20・21

巻8：1・2；5・6；9・10；11・12；13・14；19・20；23・24；25・26

巻9：1・2；11・12；13・14；15・16；17・18

巻10上：1・2；6・7

巻10中：1・11；7・13；10・21

巻10下：6・7；9・11；12・15

戊辰改修時考校官，辛丑重刊時校正官

なお、京都大学所蔵の板木は、重刊本以外には以下のものがある（鄭光2002：52参照）。

『捷解新語文釈』（1-7・8）『隣語大方』（5-19・20；6-14・15）『漢清文鑑』（9-59・60）『蒙語類解』（上-14・15）『清語老乞大』（1-17・18；2-5・6；8-7・8；9・10）『三訳総解』（1-15・16；2-11・12；3-1・2；5・6；4-11・12；5-8・9；18・19；8-15・16；10-5・6）『蒙語老乞大』（1-21・22；7-15・20）『捷解蒙語』（2-5・6）『通文館志』（4-7・8）

これらの板木については、上の新村博士の解説にあるように、大正3年（1914年）に著名な気象学者和田雄治（1859 - 1918）氏が京大に寄贈したもので、「日韓併合以前古く散逸したりしを発見し保存せしものと伝ふ」という。また、鄭光（1989；2002：62）は、「板木は、司訳院に保管されていたものが甲午更革（注1894年）後、巷間に流出し、日本人と思われる好事家が『通文館志』と清学・蒙学・倭学に係る訳学書の板木各3種ずつを見本として採集し日本へ搬出したものと思われ、これを和田雄治氏が京都大学に寄贈したものとみることができる」としている。

上記の新村（1972）「朝鮮司訳院日滿蒙語学書断簡解説」の本文中には、和田雄治氏が在朝鮮中、仁川の観測所長であったという注があり、同解説末には更に補注として「語学者（ママ）の

板木を寄附せられし和田雄治博士は旧岩代二本松の藩士、明治十二年大学（筆者注：東京帝国大学）を卒業し内務省地理局に勤務し気象天文の事を司り後仏国に留学し明治三十二年以来朝鮮にありて専ら観測の事に従ふ。大正四年辞して内地に帰り七年一月五日卒す享年六十（昭和二年六月）」とある。これを見ると、和田雄治は、内地に帰る前年に京都帝国大学（ここで学位を得ている）に板木を寄贈している。和田は、李朝時代の気象観測について研究し（『古代朝鮮観測記録調査報告書』朝鮮総督府観測所1917）、朝鮮考古学についても論文がある。歴史に造詣が深く、また有名な「測雨器」も同氏が日本本土に持ちかえった事実などを考慮すれば、板木は、新村（1918；1972）の言うように、和田氏が自ら（発見し）保存していた可能性が高い。

これらの板木がどこで発見されたかは不明である。司訳院で保管されていた訳学書類の板木は、司訳院の廃止（1894年）で散逸が始ったのであろう。しかし、その後、第二次大戦中、板木（の一部）は、朝鮮書籍印刷会社の倉庫の屋根裏にあったことが今西（1958：53）で分かる（鄭光・尹世英（1998）により）。以下、今西（1958）の原文にあたり引用する。

十数年前戦時中のことであるが、田川孝三氏が京城の旧司訳院の建物（当時朝鮮書籍印刷会社の倉庫だった）屋根裏から旧司訳院の版木多数を発見された。当時会社の者が、この中から手頃なのを取って箱火鉢にしたりしているのを目睹した氏は、慨嘆して社長に談じ、これを朝鮮史編修会に運んで保存することにしたが、その中には象院題語の完全なもの、完全ではなかったが大物として通文館志、捷解新語等があり、また満蒙文のものも若干ありしう記憶されているそうである。

朝鮮書籍印刷会社の倉庫がソウルのどこにあったか不明である（朝鮮書籍印刷株式会社自体は、京城府大島町38番地（1943年以降は竜山区大島町）にあった）。ちなみに上記引用文で発見者とされる田川孝三氏について補説しておく。田川孝三氏（1909-1988）は朝鮮史を専門とし、1931年京城帝国大学史学科を卒業後、同大助手を経て、1933年頃、朝鮮総督府朝鮮史編修会修史官補（『朝鮮学報』131追悼文参照）となり、のち修史官となったが、大戦後は、東洋文庫、東京大学等で研究をすすめた。板木の発見当時、田川氏は修史官であった。なお朝鮮総督府朝鮮史編修会は『朝鮮史』の編修、刊行を中心に種々の基礎史料を収集し刊行した。『朝鮮史』は1938年に完成したが、その後も修史事業を続けた。終戦とともに朝鮮史編修会は1946年5月31日に同編修会は消滅した（中村1969「朝鮮史の編修と朝鮮史料の蒐集」）。旧朝鮮史編修会の史料は現在の韓国国史編纂委員会に引き継がれた。問題の板木が高麗大学校に所蔵されていることについて、鄭光・尹世英（1998：5）で、（板木は）「国史編纂委員会をへて高麗大学校博物館に移転したのではないかと思う」としているが、この問題について筆者は、歴史学者申奭鎬（신석호）が深く関係していると推測している。すなわち、上記朝鮮史編修会は消滅とともに同編修会の修史官であった申奭鎬に引き継がれた（中村ibid）のだが、同氏は、1946年3月政府機関として創設された国史館の館長となり、史料の保存管理を行った。さらに、49年国史館は国史編纂委員会に改編さ

れ、申爽鎬は事務局長となった。またいっぽうで、申爽鎬は1946年から50年まで高麗大学校教授であった（その後は成均館大学校教授・学長・大学院長）（国史編纂委員会HP；한국정신문화연구원（1999））。すると、問題の板木は申爽鎬が高麗大学校教授であった時期に、同校に移管された可能性が高いことが推定される。

4．重刊本伝本の印刷における前後関係

上記のように、現在筆者は6種の諸本が管見に入っており、他に現存板木による新摺分が全巻の半分近くある。これらの諸本はすべて同板であるが、細部をみると印刷上、異なる部分もある。これらの異同および版の前後関係について現在調査、研究を行っているが、今回はその一部について報告することにする。

版の前後関係については、これまでほとんど研究されていないが、言及されたことはある^{注3)}。影印本『重刊改修捷解新語』（京都大学国語学国文学研究室編（1960））の「はしがき」で浜田敦氏は、「ここに本文複製の底本としたものは、現在東洋文庫に蔵せられる、故幣原坦博士旧蔵本である…。また、他の一本、それはおそらく東洋文庫本よりも古く、一層原刷に近いと思われるものの現蔵者、曹洞宗大本山永平寺当局、および旧蔵者たる金沢庄三郎博士の、同様のご好意をも忘れることが出来ない。」とし、東洋文庫本より濯足文庫本（金沢博士旧蔵本）が古い刷りであることを推測している。また安田（1960）は、「金沢庄三郎博士旧蔵、現永平寺本、小倉博士旧蔵、現東大言語学研究室蔵本には、かの、巻十（下）の巻末の「伊呂波」などを欠くが、M.Courantの引用した一本や、東洋文庫本には付載されているのである。また、この「伊呂波」は『捷解新語文釈』（嘉慶元年、一七九六年）にも見られるのである。想像を廻らせば、版を重ねた結果、何版か以後（遅くとも一七九六年以後）から、「伊呂波」は、なべて、本書以外の日本語関係書にも付載されるようになったのではあるまいか。もしそうだとすれば、M.Courant本、東洋文庫本は相当後のものということになるであろう。」としている。ここで安田博士が述べられているM.Courant本は、実は、その後『改修捷解新語』であることが判明した（安田1987等）。また、ここには挙げられていないが、原刷に近いと目される奎章閣本の巻末に「伊呂波」が付載されていることから、「伊呂波」付載の有無によって版の前後を云々することは出来ないであろう。しかし、ここでも、東洋文庫本を後刷と推定している。

版の前後関係は、一般的には板木の状態から推測することができる。もとより、全体的な調査はできていないので、部分的な報告に過ぎないことをお断りしておく。

まず、東洋文庫本が最も後刷であることを示す格好の例がある。5-15bの1行目後半本文「しう。ころく。」（（来月）十五六）（本文左の音注「고로구」、本文右の朝鮮語訳「五六」）の部分は、奎章閣本、中央図書館本、小倉文庫本、濯足文庫本にはあるが、東洋文庫本は完全に欠けている（なお以下の板木新摺とは、高麗大学校博物館所蔵の板木から新摺されたもので、影印が鄭光・尹

世英(1998)の第2部に掲載されている。



奎章閣本

中央図書館本

濯足文庫本

小倉文庫本

東洋文庫本

板木新摺

の行末部分が空白であるのは、ここにあった埋め木が脱落したためである。事実、この部分の板木(収蔵番号D1290)は、左下の写真に見るように、埋め木であった部分が欠損している。



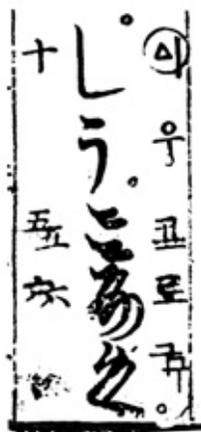
(板木)

埋め木は、板木が彫られた後、誤りが発見されたため、(部分的に削除された後)新たに挿入される訂正用の木片である。ここでは、何らかの理由で、「五六/ころく/고로구」とした訂正用の埋め木が作成され、諸本が印刷されていた。しかし版を重ねるうちに、埋め木が脱落し、補填なきままに東洋文庫本が摺られたのであろう。そして、板木は埋め木が欠落したまま現在に至っていると考えられる。すなわち、東洋文庫本は最も後刷であることがわかる。

この埋め木部分に関して、もう一つ注目されることがある。

それは、この部分が奎章閣本と中央図書館本、濯足文庫本、小倉文庫本とで異なるという点である。上の図版の奎章閣本を見ると、この埋め木部分「ころく」が上の「しう」より、わずかに右にずれていることに気が付く。左の朝鮮語訳(「五六」)も、上の「十」に比べると同様に右にずれている。しかし右の音注は上と揃っている(これ以上右にずれようがないが)。ところが、他の諸本をみると、この「ころく」の部分は、左に移動し、「五六」の位置も上に、音注も少し上に移動している。のみならず、両本では、「五」と「六」の間隔も異なり、音注「고로구」の各文字の間隔も異なる。また「ころく」も両本で文字間隔が僅かに異なる。そこで、奎章閣本と濯足文庫本両のこの行を重ね合わせて見たのが次ページの図版である。

「(けつ)しう」までは本文の仮名部分、音注、朝鮮語部分も完全に一致して重なっている。しかし「ころく」の部分は、仮名、音注、朝鮮語すべて重ならない。また、この部分だけに関し



ても、両者は文字の間隔が異なっている。いっぽう、中央図書館本、濯足文庫本、小倉文庫本は、重ねあわせても全て一致している。このことは、おそらく、まず不揃いな奎章閣本があり、その不揃いを是正するため、埋め木が作られたと推定される。

さらに、もう一つ注意されることがある。それは、「ころく」の上の「う」の音注である。奎章閣本は^うであるが、他の諸本は^oなのである(上の板木の写真も参照)。これは、奎章閣本が刷られたあとで、終声の^oが新たに加えられたのである。以上の諸点を併せると、少なくとも、この部分については、明らかに奎章閣本が最も初期の刷りであり、東洋文庫本が最も後の刷りである。そして中央図書館本、濯足文庫本、小倉文庫本は

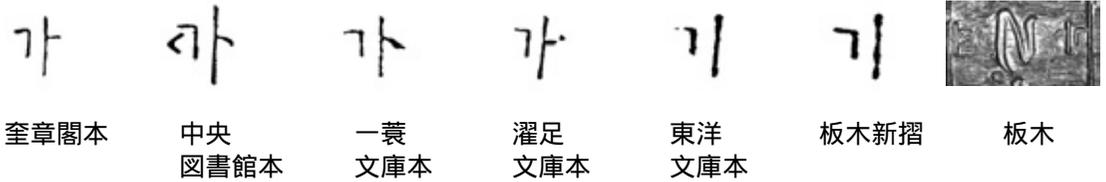
中間に属することが分かる。なお、板木には埋め木が何箇所もあり、いろいろな問題を含んでいる。これらについては今後、稿を改めて論ずる予定である。

次に、8-25aのハングルの一部を取り上げ、板の摩滅の問題から、版の前後を検討してみる。8-25aの4行目末から25b1行目冒頭に「かゑり。たう。そんし。まする」とあるが、その対訳朝鮮語部分「도라가고저너기늑이다」の「가」と「저」の印刷に注目する(小倉文庫本はこの部分が補筆されており印刷ではない)。



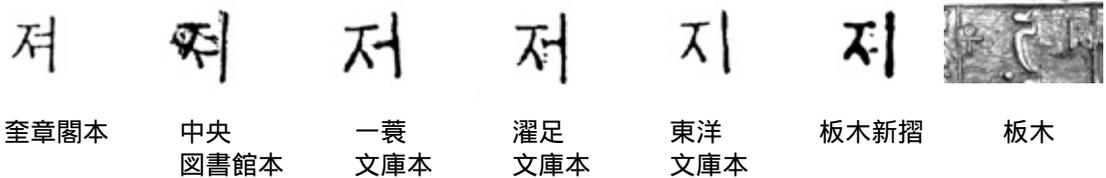
奎章閣本 中央図書館本 一蓑文庫本 濯足文庫本 東洋文庫本 板木新摺

上記のガを拡大すると、以下のようになる。板木の写真も掲げる。



奎章閣本と濯足文庫本のトは横棒が真っ直ぐに横に伸びているが、中央図書館本と一蓑文庫本のそれは、補筆されているようである。すでに横棒が欠けていたのであろうか。東洋文庫本は縦棒のみである。現在の板木はやはり横棒を欠いており、板木をみても横棒がない。ここだけみると濯足文庫本は奎章閣本に近いようでもある。

次に、8-25 b 1行目の저については、次のようである。板木の写真も掲げる。



の奎章閣本は明確にㄹの横棒2本が印刷されている。中央図書館本は、2本が見えるものの縦棒と少し離れている。濯足文庫本、一蓑文庫本は1本しか見えず、東洋文庫本は横棒が見えない。板木新摺では薄く部分的に2本が見える。板木では2本が明確に確認できないほど摩滅している。濯足文庫本と一蓑文庫本では1本が出ているが、奎章閣本のㄹと比べると、その2本のいずれの位置とも異なる。横棒はㄹの2本線の間から出ているようである。また、一蓑文庫本の横棒は、補筆のようにも見える。濯足文庫本は横一画の出だしが筆を下ろしたようにも見える。但し、濯足文庫本には横棒の下に僅かに点が見えるが、これは位置からいって汚れかもしれない。板木新摺では、僅かに2線の痕跡のような2点が見えている。位置的には奎章閣本の2本とほぼ一致している。濯足文庫本と一蓑文庫本では補筆したのかもしれない。板木の新摺では、わずかに残った部分が出たのであろう。刷りの問題とからんでいるので、はっきりしたことは言えないが、少なくとも、奎章閣本は、摩滅以前に刷られたものであることは確実である。

奎章閣本の印刷が明瞭であることは、「区切り小点」(辻1991)からも分かる。日本語本文に付けられた「区切り小点」の「。」は、小さいため、摩滅しやすく、印刷が不鮮明になったり、消えたりする。例えば、5-13a 1行目「もたせて。御さ(り)」の「て」の次の「。」は、奎章閣本のみに見られ、他は見られない(一蓑文庫本は巻5なし)。また、4-4bの1、2行目の「いて。いりわ。…… そのし(たらお)」に見られる3点の「。」は、東洋文庫本を除く諸本はあるものの、東洋文庫本は1点(「いりわ。」)のみである(東洋文庫本原本にあたって確認した。なお、この

部分は板木を欠く)。東洋文庫本は、他の諸本に比して不鮮明である。

摩滅に関する全体的検討は稿を改めるが、まず、いろいろな点で、奎章閣本は他の諸本に比して、印刷が鮮明である。奎章閣という場所や上記の埋め木の問題を考慮すると、奎章閣本は原刷に属するものであろう。いっぽう東洋文庫本は、他本に比して、板の摩滅によると見られる不鮮明な文字も多く、また、しばしば匡郭などに欠損が見られる(これは板木の欠損部と対応していることを確認した)。さらに上記のように埋め木を欠落させたまま印刷した部分も見られる。したがって、いずれの点からみても、東洋文庫本は最も後刷のものである。一蓑文庫本は、東洋文庫本ほどではないが、東洋文庫本を除く諸本に見られない欠損個所が見られる。例えば、7-4bの上覧の「客」の表示は、東洋文庫本と一蓑文庫本には見られない(板木でも欠損)が、他の諸本では印刷されている。また、7-1bの下の匡郭の線が東洋文庫本と一蓑文庫では一部不鮮明である(板木は欠損)が、他の諸本は鮮明である。この点からいえば、一蓑文庫本は東洋文庫本に近いといえる。ただし、このような不鮮明さが板木の摩滅によるのか、刷りの悪さによるのか分からない場合もあり、難しい問題を含んでいる。

5. まとめ

本稿では、6種の伝来する重刊本諸本(奎章閣本、中央図書館本、一蓑文庫本、濯足文庫本、小倉文庫本、東洋文庫本)の残存状況を概観し、高麗大学校と京都大学に残存している重刊本の板木(全体の44%が残存)についても検討した。ついで諸本の印刷の前後関係を埋め木と板木の磨滅等との関係から論じた。今回、部分的な調査ではあるが、奎章閣本が最も原刷りに近く、東洋文庫本が最も後刷であること、残りの諸本はその中間に位置することがほぼ確定できた。今後は全体的な検討から版の前後関係について、より詳しく検討していきたい。

注)

- 1) 本稿は、平成14～16年度科学研究費補助金研究成果報告書『日本・朝鮮資料の言語史的研究』の第3章(未公刊部分)をもとに18・19年度の成果を取り入れまとめたものである。報告書と一部重複する部分があることをお断りしておく。
- 2) 新村(1972)では「書」を「者」とするが同(1918)に従い訂正する。
- 3) 以下の言及の時代には、濯足文庫本、小倉文庫本、東洋文庫本しか知られていなかった。

【主要参考文献】

- 高麗大学校博物館編(1989)『博物館収蔵品目録』高麗大学校博物館
 鄭光(1989)「譯學書の刊板에 대하여—일본京都大學 소장 司譯院 木版을 중심으로—」
 『周時經學報』4 周時經研究所 (鄭光(2002)所収)
 (2002)『譯學書研究』J&C

鄭光・尹世英(1998)『司譯院譯學書冊板研究』高麗大學校出版部

한국정신문화연구원(1999)『한국인물대사전』중앙 M&B

弘文閣(1990)『重刊捷解新語』韓国 弘文閣(奎章閣本)

今西春秋(1958)「漢清文鑑解説」『朝鮮學報』12

京都大学国語学国文学研究室編(1960)『重刊改修捷解新語』京都大学国文学会

(京大國語国文学研究室編(1973)所収)(東洋文庫本)

(1973)『三本対照 捷解新語 釈文・索引・解題編』,京都大学国文学会

国立国語研究所編(1997)『日本語と朝鮮語』(上巻 回顧と展望編 下巻 研究論文編)くろしお出版

中村栄孝(1969)『日鮮関係史の研究』下,吉川弘文館

新村出(1918)「朝鮮司訳院日滿蒙語学書斷簡解説」京都大学文学部

(もと『芸文』)(同(1927) 同(1972)所収)

(1927)『東方言語史叢考』岩波書店

(1972)『新村出全集(第1巻)』筑摩書房

辻 星児(1991)「重刊改修捷解新語に見られる区切り小点について」

『辞書・外国資料による日本語研究』,和泉書院(辻1997b所収)

(1997a)「『捷解新語』に見られる文法意識 対訳朝鮮語の配置を通して」

国立国語研究所(1997)(下)

(1997b)『朝鮮語史における『捷解新語』』岡山大学文学部叢書16 岡山大学文学部

(2003)「ソウル大学校奎章閣所蔵の「朝鮮資料」について」『岡大國文論稿』31

安田 章(1960)「重刊改修捷解新語解題」『重刊改修捷解新語』

(1987)「改修捷解新語解題」『改修捷解新語』,京都大学国文学会

(1990)『外国資料と中世国語』,三省堂

【付記】本稿は19年度科学研究費補助金、基盤研究(C)「日本・朝鮮資料の総合的研究」

(課題番号17520266)による研究成果の一部である。